広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	身体 ： 心身論に於ける思想
Author(s)	ショーン レナード,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1997 : 41 - 49
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039382
Right	
Relation	

身体：心身論に於ける思想

ショーン・レナード

I. 身体と社会

この世に生まれて、育ってゆくにつれて外なる世界から影響を受けないものはないだろう。いわゆる人間とは社会、あるいは与えられた現実を媒介にして形成される。だから人間が初めて、生きている世界と対応するにはまず、その世界の在り方の構造を内に持ち込まなければ前に進まない。これは世の中に生きるにはやむを得ないことである。また、その結果の一つとして、人が年を取れば取るほど、その社会の産物であるという存在感が個人の中に固まってゆく。だからこそ、「以心伝心」というものがあって、全ての人間に共通する場がある。しかし、生をこういうふうに枠に当てはめると、人の考えも行動も偏ってしまう。あるいは、生まれた時の潜在的な存在から、教育、結婚、就職、繁殖などの枠に入らない部分を放って置いて、何年か経つとそれを忘れる。これは我々が自然を忘れたということを示す。つまり、我々は「理性的に」万事を偏見なしで見て、判断しているというのは虚偽である。実は、こうやっている時、我々は教わったことを繰り返しているに過ぎない。自然なる世界の分からない我々は我々を文明人だと考え、発展途上の「単純である世界」の儀式、風俗、習慣を文明人の眼で観察する。しかし、こんなものを現代社会の視点から考えるのは過ちである。なぜなら、文明人が非文明、あるいは見慣れていないものを扱う道具として、言葉しかないからだ。つまり、ある自然現象を言語化するには、それに自分の論理を与えるしかない。でも、論理化された自然現象は非自然、解釈に過ぎない。

身体の問題も同じようである。なぜなら、身体を考えるのは、殆ど哲学の分野であるからだ。しかも、哲学は殆ど理性の遊びだと思う。だから、益々議論が紛らわしくなる。身体を考えるには、色々な見方がある。人間としての実感、科学者としての生理的な身体、宗教的な身体、等々。しかも、どの見方も一つの意見、あるいは解釈に過ぎない。人間の身体は一元であるか、二元であるか、どんなに議論して、実証を出しても結論がでないのではないか。ただし、だからといって結論の追求をやめる訳にもいかない。ただ、身体というのは、非常に個人的なものである為、どの学問の分野から分析しても、物足りないような結論がでるように思う。その為、個人個人のレベルで、今まで教わったことを忘れながら、自分自身の全ての経験を回想して、自然に向けて尋ねるのが正解かもしれない。そこで、もう一度身体を考えてみたいと思う。

まず、身体を具体的に考えるという目的の為に、二つの代表的な議論を取り上げた

いと思う。それは、第一に日本哲学と思想に於ける身体論。これには、市川浩、湯浅泰雄、養老孟司の議論を見てみたい。これらの議論は一般として主ー客、内ー外、感覚ー運動などの軸の上に成り立っている。しかも、論理の過程を経て、社会を通して具体的な身体観を得ることができる。しかし、これに対して第二にカルロス・カスタネダの『意識への回帰』に出てくる身体観念も見てみたい。この身体は論理で説ける訳ではない。しかも、社会には存在する場もない。寧ろ、カスタネダの経験自体を通して現れたものである。

市川浩によると、人間は生まれた時「身ごもられている状態」にいる。そして、母親に依存しつつ、独立性を強めてゆく。最初は、他人を自分と区別せずにいる。しかし次第に、感覚に対して運動することによって活動の図式が形づくられ、世界が相関的に秩序化する。しかし、未だ言語によるコミュニケーションは未発達である為、身のパースペクティヴは「いまーここ」に「中心化」し、視点や位置の交換は不可能である。成長するにつれて幼児は自分と母親の区別ができるようになり、自己性という観念が成立する。従って、自分の反照を介して、他人というものが存在し始める。「遊び」の行動を通して初めて「ルール」あるいは行動的な原則を内面化する。これは人間、またはモノと異なって、「非人称的」なシステムである。しかも、これを内面化すると同時に身体がそのシステムの内にも存在し始める。また、持ち込まれた構造は、制度や社会に於ける組織のモデルとなるものである。ある時点で、人の操作が事物との具体的な結び付きから解放される。市川氏がこれについてこう述べる。

『操作の内容と形式が分化し、言葉によって現された単なる仮説に過ぎない命題に基づく、純粋に可能的な操作が行われようになる。こうして「操作（オペラシオン）」は、身と身の働きに癒着し、身に中心化した在り方（活動）から表象的に脱ー中心化される。これは同時に、表象のうえで身みずからをコミュニケーションによって拡大された間主体的世界のうちに位置づけることでもある。』という。こういうふうに、身が対照的に、社会によって脱ー中心化され、人称化あるいは個性を得る。しかし、同じ制度によって非人称化される。つまり身は身の役割あるいは、働きのうちに組み込まれる。そして、自分は仕事としての役割に対して、より強く個性を感じ、「再中心化」する。しかも、この循環的な過程を経て、再分節化した自分の身に映る社会をも改めて考える。このプロセスを市川が「身分け」と定義する。身体、あるいは「身」がこのような流動性を持つと同じように単なる一つのレベル、一つの姿として現れるのではない。主体としての身体、あるいは私、貴方である身体があり、間主体的身体、あるいは社会、間柄、我々という身体もある。しかも、客観的な身体、すなわち非人称的な役割としての身体もある。つまり、社会の影響の下で形成するに従って、その総体の様々なレベルを占める。この問題の元にあるのはパースペクティヴである。主体的にものを把握することによって、身をも主体的に把握することとなる。例えば、外を寒いと感じる場合、「そとの寒さ」と共に自分の「身体の温かさ」を同時に意識する。言い換えれば、我々が対照的に世界を知覚している理由は、要

するにその行動は生まれながら身に付けられたのだから。更に、「身分け」とされた行為は、基本的に人間と万事との相関的な独立性を意味する。従って、その内の一つが欠けることによって、同時にパースペクティヴがなくなり、人間と世界が同じものになる。市川がこの点に触れて、こう述べる。

『もし世界を無媒介に身としてとらえるとすれば、身が世界と一体化し、理念的にはすべての「身分け」の消滅をもたらす神秘主義的一者にいたるのは、必然的であろう。しかし現実には、身は、他の身とのかかわりにおいてあり、身と世界との分節化は、社会的にも、歴史的にも、重層的に構造化され、相互にわかちがたく嵌入しあっている。』パースペクティヴの問題は基本的に意識の問題である。世の中を意識する際、内面化した秩序組織の構造に吸い込まれた立場から対照的に考えている。ただし、その無遠近法的な視点に居るというよりも、その考察中枢自体は、我々の論理によって作られた現実観でありながら、我々自身もその現実観の産物である。つまり原因不明の現象がある程、未知現象もあるといってよかろう。いいかえれば、意識した世界を介して自我意識というものがある。その意識は意識によって生まれたものとすれば、前意識的な意識と現実的な意識があるといっても問題ないだろう。こういう潜在的な意識を含んだものとして市川が「人間的現実」を取り上げている。また、社会全体は「人間的現実」の単なる一部である。この観念の中で、意識化した「現実的統合」と現実化しなかった「潜在的統合」がある。いわゆる、現実化＝意識化。

湯浅泰雄が現実の謎を解くに、「間柄」という言葉を取りあげている。「間柄」というのは、間主体的な世界を代表する。つまり、人間関係というものに支えられている。間主体的間柄に生きているのは、もちろん主体である。しかも、観念としての人間存在、あるいは科学に於ける非人称的客観的な「物質的諸要素の結合体」も間柄である。やむを得ず、こうして心身二元論的な身体観が生み出される。というのは、身体を物質として見るとたんに、個性がなくなる。すると、個人性のある自分自身と異なったものになってしまう。こういうふうに、自我意識を持つ身体である私の性質が単なる物質的な身体に対して、区別される。その区別の相対的な特徴となるのは有精神対無精神なのである。しかも、この議論も社会場面に於ける主ー客の軸のうえに成り立っている。

間柄、また社会は、人間との間に相互依存的な関係があるに従って、両者が同じような特徴を持つ。主ー客の社会モデルとして湯浅は、有名人と無名の大衆を取りあげる。それは、市川の「身分け」に似たものである。各客観的身体に主体的な身体が潜んでいる。また、有名人である政治家、俳優などは社会の場面で主体であると共に大衆の一部である。これは、各人が多義的な存在を持つのと殆ど重なるが、一つだけの違いがある。有名人と無名の大衆の間に応対の一向性がある。これは人間において、意識と意識下との関係をも示す。要するに、身体の意識する部分は、意識下のレベルにも入る。しかし、意識下のレベルで入ってきた情報を意識しようとしても、できない。これはつまり、人間関係に於け

る一向性と同じパタンである。また、内面化した構造の役割を果たすものとして、意識であると既に述べたが、湯浅の言葉でいえば記憶を回想することによって、身体の内なる構造と感覚を通して外から来る感覚刺戟と対応して、思考対象を頭に浮かべる。そして感覚ー運動というシステムが内ー外を繋ぐミチとなる。しかし、その内ー外を繋ぐミチとなるものは何なんだろう。それは無意識である。湯浅の認識論は二つに分かれている。それは感覚ー思考である。要するに、感覚は刺戟であり、「ナマ」の世界である。思考はそのナマなるものの対照的な意味や解釈である。感覚と思想の交わりによって、知覚が発生する。湯浅は以下のように議論を続ける。

『運動図式とは、環境の移り変わりに対して無意識に対応する時の身体の微妙な動きを支配するシステムであって、シェリントンのいう固有感覚のセンターに当るだろう。ベルグソンはさらに、この運動図式が感覚神経と運動神経によって人体と環境の間につくられている回路の働き方を、コントロールしていると考える。』ところが、限られた条件で、意識の世界と無意識の世界が交差する場合がある。その目的は生命保持である。つまり、無意識は時間性があると、湯浅がいう。それは過去の生活史全体が保存されつつ、前に向き現在必要となる情報を適当に取り出す。湯浅はこう述べる。

『ベルグソンはこのような記憶の深い次元を「純粋記憶」とよぶ。「純粋」というのは、知覚したがって外界の物的環境と無関係に存在するという意味である。この場合、脳はそういう純粋記憶の蓄積の中から、現在生きて行動するために必要な記憶をえらび出して眼前の知覚に結びつける機能を果たしている。こういう考え方にもとづいて、彼は、脳は記憶を保存する器官ではなくて、記憶をよび出すスイッチのような役割をしていると考える。彼は、純粋記憶が示している心の深い次元は、権利上脳から独立して存在しているという。』こういうふうに人間の身体は世の中をいきてゆく。

養老孟司の述べる身体は基本的に上述の論と同質のものであるが、彼は科学者としての立場から見ている為、アプローチが少しずれる。養老の議論は「唯脳論」という説に基づいている。これは市川の「人間的現実」をも湯浅の「間柄」をも人間の脳に持ち込んで、生理科学の視点から分析した結果である。唯脳論の基本的な前提はつまり、脳が肉体的現実も、心的現実も統合している。養老によると、精神と身体を区別する、こうした人間の傾向は要するに、脳内の構造がそういうふうに二元的であるからだ。しかも、この議論に自然ー人工という軸が大きな役割を果たしている。養老によると、我々が「自然」となる世界を忘れた。そして、「人工」のみを介して現実統合をしている。更に、「人工」というのは社会であり、「人間が意図して設計したもの」である。人工分野のいずれを考えても、未だ人間的な論理であるという事実を免れ難い。「自然」現象は我々の論理的な枠には入らない。故に、理解する事が一層困難になる従っていわゆる現象が勝手に否定されてしまう。しかし、唯脳論は自然物である脳自体と脳裏の産物である人工、その妥協のできない両者を指摘して、二元論的な身体を前提にしている。要するに、自然物である脳

から非自然文明が発生している程、脳も意識ー無意識に於ける一向性を抱えている。つまり、科学と哲学の衝突する研究法にも関わらず、養老の描写する人間対社会関係は基本的に同じ。それは、脳内あるいは身体の内面的な構造は循環的に「外」と交わり、互いを作り合っている。しかも、内に篭るアイデンティティは自分自身の現実感と結び付いている。

II. 潜在的な人間

カルロス・カスタネダの『意識への回帰』に出てくる現実感は、既に述べたように、比較的論理的ではない。この本の中で、カスタネダはメキシコ・インディアンの呪術師、ドン・ファンとの師弟関係、十年以上を通して、教わったことを介して、出会った現象について、詳しく書いた。主に、呪術師または「見る者」であるドン・ファンは「意識の操作術」の謎を解く。また、呪術というのは基本的に意識の統合である。しかし、呪術師は理性や論理で意識の謎を説くより寧ろ、意識そのものを具体的に扱うのである。でも、意識を扱おうとするには「力」の余裕が必要である。「力」を高めることによって、呪術の弟子が個人個人で、現実の自分を忘れなければいけない。現実の自分というのは、習慣的な行動、固まった現実観、自尊心等の余計な欲求である。つまり、気ままに暮らすことは、「力」の無駄遣いになるので、排除する。結果、もっと能率的な人間が現れてくる。こういうふうに、意識統合の設定された人間は次に、「見ること」に進む。これは、「具体的に意識を取り扱う」ことを理解する基本となる技能である。「見る」といっても、目で見る訳ではない。寧ろ、身体全体の意識で見ることである。「見る者」は自尊心等を捨てることによって得る「完璧さ」と修業の陰で、意識そのものを「見える」ようになる人達である。しかし、「見ること」について具体的に話す前に、身体をも定義する必要がある。ドン・ファンはこう述べる。

『見る者にとって、人間は輝く存在なんだ。わしらの輝きは、わしらの卵のようなものに入ったイーグルの放射物の一部でできている。その部分、そこに入れられたひと握りの放射物が、わしらを人間にしているんだ。知覚するということは、そこに入れられた放射物と、外部にある放射物とを適合させることだ。』このイーグルというのは万事がそこに由来する意識の固まりであって、イーグルの放射物というものはその固まりを源として、万事となる意識と非意識のエネルギーである。意識のある放射物は生き物となり、従って非意識的な放射物は生物以外の全てである。しかも、意識の固まりをイーグルと名付けることは、当時の人の世界的文脈を示す。つまり、「イーグル」の本質は不可知なものだから、「見た」形を表す為にイーグルの形に例えられたに過ぎない。続いて、ドン・ファンは身体を、卵状のようなものとして取り上げた。また、その卵である身体とイーグルの放射物の接触面を意識の「集合点」と呼ぶ。要するに、我々自身が無限的意識と衝突することによって、自我意識と、個人の現実観が生まれる。ところが、「集合点」の位置に

よって、現実が異なる。言い換えれば、我々人間が受け入れる放射物を分節する結果、現実が発生する。しかし、発生した現実の在り方は、我々の「卵」に入ってきた放射物のどれを分節したかによる。各放射物は、身体の構造によって、決まった位置を占める。従って、「集合点」というのは、身体の「何処」あるいは、どの放射物を取り扱うかを示す。我々が共通の現実観を抱くことは、世の中に生きることによって、単なる一つの現実を取り扱う方が最も安定する方法だからである。しかも、社会が「集合点」に影響を及ぼすことは言うまでもないが、それより人間が先天的にその傾向性を付与されているという要因もある。イーグルの放射物と人間の現実について、ドン・ファンはこう述べる。

(見る者が)『生物はある範囲の放射物をつかむべくつくられていて、種によってその範囲が違うということも知った。放射物は生物に巨大な圧力をおよぼし、その圧力を通して生物はそれぞれの知覚できる世界を構築しているのだ。

「わしら人間の場合はその放射物を使い、それをリアリティと解釈している。だが、人間が感じとるイーグルの放射物はほんのわずかなんだから、わしらの知覚に頼り切るのはバカげているんだ。しかも、だからといって知覚をまるで無視するなんてことはできっこない。」』つまり、我々が、現実となるある掴む放射物をむと同時に、人間となる放射物で作られている。従って、動物の各種が自分に適した範囲の放射物から成り立っている。というのは、先天的に知覚する範囲が既に決まっていることを示している。また、各範囲が重ならない為、知覚することも異なる。つまり、我々が人間だから、知覚する世の中は人間的現実である。しかし、呪術は、その範囲を乗り越える実践である。ここで、「見ること」にもう一度触れてみたい。我々が、自分の「集合点」を媒介して現実を構築する場合、(異なる次元に訪れた経験ある人を除いて)その「集合点」を転移することなしに知覚する。だからこそ、木を見る時、木に見える。しかし、「見ること」というのは「集合点」の移行で、徹底的に広い範囲で知覚することである。従って、木を「見る」場合、「集合点」の位置によって、木とは限らない別の物に見える。また、「見る者」は、イーグルの放射物、あるいはナマの意識を持つエネルギーさえ知覚できる。ということは、認識自体は抽象的な次元から具体性を持つ把握のできるような立場に移る。また、人間が「集合点」を移行させることが、知覚の範囲を広げるだけではない。ドン・ファンによると、地球での放射物は七つの範疇に分かれている。現実と呼ぶものはその内の一つの範疇を統合しているということである。だから、上述した動物の異なる知覚範囲はまだその一つの範疇に入る。つまり、地球にある七つの範疇の中で、我々が知覚して現実とするのは七つの内の一つのほんの僅かである。また、同じ範疇にある普段と違う放射物を集合させることは、知覚範囲を広げることになる。しかし、他の六つの範疇は全く違う現実を産み出す。しかも、その範疇を知覚するには「集合点」を移行させることによって、自分実体がその範疇に属する結果、人間的な現実、またはこの世から一瞬に消える。そして、実際にその範疇の世界に入る。ところが、現実統合はドン・ファンが述べる、「知覚操作術」である。

故に、自分の意志で消えた訳なので、次元のスリップを起こしたのみである。はっきり言えば、「知覚操作術」は意志的に狂うことである。しかし、呪術師と乱心者の違いは、呪術師の抱く冷静な態度と「完璧」な暮らし方から得る支配力にある。「知覚の操作術」はだから、意志によって固まった行為から切り放すことである。そうすると、人間の潜在的知覚力が次第に現れてくる。そして、潜んでいる知覚力を解放すると全意識統合の悟りに至る。ドン・ファンによるとこれは人間にとって、唯一の有意味的な存在目的である。

III. 完全人間

近代哲学とカスタネダに於いて、身体を把握するアプローチが重ならないのは言うまでもない。しかし、最後に現れてくる各身体観が共用する普遍性を持つ特徴は無意識にあるように思う。だからここで、無意識について少し述べてみたいと思う。まず、私は前提として無意識を三つに分けたい。

それは、第一に既知である。これは主に、我々が知覚する意識である。つまり、「我々」である社会。そして、社会場面に存在する全てである。でもそれは、物質とは限らず、論理であり、理性でもある。しかも、人情も嫌悪もこの範疇に入る。既知は三の次元で、実際は最も狭くありながら、我々が考察している立場から無限性を感じる。しかも、社会であるこの次元は徹底的に中心向きである。これは、人間が生まれた世界なのだから、中心と考えるのはやむを得ないことかもしれないが、無意識全体と並べて見ると、本当に道に迷ったような気がする。我々は社会、社会は我々である。今日、そういう循環的パターンは普遍的である。しかし、社会意識の境を乗り越えることは可能である。カスタネダにとって第一歩はただ、そう信じることである。

第二に、未知次元がある。これを、既知の世界が、「分からない現象」として認める。これは、神秘的な世界でもあり、宗教などの根ざしている次元でもある。しかし、未知に論理がないというか、未知次元の論理は分からないと言わざるを得ない。しかも、因果関係の分からない現象があるよりも、存在すること自体の分からない現象が多いのである。また、「見る者」の世界は確かに、未知の次元に所属する。つまり、未知次元は、超自然世界とでも定義すると問題ないだろう。特徴として、システムの内なる論理は理解不可能としても、そのシステムを利用することは、我々にとって可能である。そのシステムの構造は、我々の身体にも潜在的な基盤構造としてはある。

第三に、不可知な次元がある。これは、我々にとって、文脈のない条件である。また、想像もできない状態。三つの中で、一番大きな次元だが、これ以上述べるつもりはない。

ここで私は身体と無意識を結びつける現象として、「気」という観念を特に考えてみたいと思う。「気」あるいは気功という修業により、発生するエネルギーは非常に神秘

的なものである。しかし、抽象的なものとしてしか哲学に扱われていない。市川が、「気」について、おおざっぱに触れていう、『「気」は天地を満たすものとして、いわゆる物質的なものから、心までをおおっている。』「気」は確かに天地を満たしているが、それはどういうふうにかというと、既知と未知の間に、統合的意識として、ある。湯浅の議論に、自律神経に支配されている自律系と、感覚ー運動神経に支配されている体性系の関係を指摘する。自律系は、身体のなかでひとりでに働く器官である。例えば、心臓、腎臓などの意識しなくてもいい身体の一部である。従って、体性系は感覚によって、判断したり、運動したり自発的に動くシステムである。しかし、呼吸器は二つの領域に入る。寝ている間、呼吸は自動的に起こる、でもそれに対して自分の意志でも深呼吸したり、息を止めたりすることができる。また、仏教などの修業には、呼吸法が注目されている。そして、その修業によって、高めてゆくのは、「気」そのものである。つまり、自律系と体性系を共用することによって、ある程度自分の意志が無意識の範囲に忍び込む。その結果、「気」が高められてゆく。さらに、「気」は意志で制御できるものである。つまり、認識過程を通して、発生させるのも修業の方法である。この場合もまた、意志的な思考が抽象的な信念に基づく無意識に於ける限られた部分を制御している。こういうふうに、「気」は単なる一つの次元とは限られていない。共に、既知と未知を覆う現象である。要するに、「気」は肉体ー精神、意識ー無意識、二つの軸を貫いて実存している。また、「気」は同時にエネルギーであり、意識でもある。しかも、エネルギーである気はまた、「力」とも定義である。呪術に扱われている「力」は地球から発生し、「天地を満たすもの」である。「気」は意志で統合するものでもあると同時に意識である為、意識を「見ること」の基になる「力」は「気」と同じ性質あるものである。いわゆる、「気」は放射物と同じような役割を果たす。また、既知と未知、肉体と精神、意志と意識下を繋ぐ橋である。

こうして、エネルギーであり、力であり、意識である「気」によって捉えられた無意識を「集合的無意識」と呼ぶのであろう。つまり、宇宙中の生き物は同じ意識を共用することを前提にすれば、自我意識にアイデンティティが所属する我々は、生そのものを介して普遍的な平等性を見出せる。また、ドン・ファンは、人間は基本的にこの世に存在するもの全てに対して知覚潜在性が付与されている、という。つまり、人間とは、「集合点」の位置が異なる動物が地震等を予測することができると同じように、呪術師は「集合点」を移行させることによって、天災を予知すること等の超自然的な才能が人間に潜んでいることを示している。このことから、更に万事同一論も具体性を得るのではないだろうか。

最後に、人間の生理的構造に触れ、敢えて結論を出したいと思う。科学の観点から、脳は人間の「集合点」でもあり、認識の中心である。しかし、ドン・ファンがいうように、我々が「知覚する身体」を持つとすれば、それでは二つの観念が衝突する。脳は確かに、独特な役割を果たす。しかし、脳で意識しない世界も存在しているということも、かなりの証拠をもたらしている。また、既知と未知の次元を併せて、我々が意識できない範囲が

殆どであると同じように、脳という器官自体も、割と使われていない事実は科学の側からも認められている。要するに、物質は基本的には原子として現れるエネルギーであったが、「気」は意識であり、エネルギーでもあった。つまり、物心一如的な考え方として、万事をエネルギーとして議論をした。それは、物質を非意識エネルギーとし、精神や認識を有意識的エネルギーとし、そして、意識自体を無意識的エネルギーとするものである。更に、意識、エネルギー、物質、精神、認識等の網目に脳が置かれている。脳という物質の固まりにエネルギーの全種が共存すると共に、意識することによって脳が媒介的な器官としての役割を果たす。従って、脳を絶対と考える生理学と脳が絶対ではないと考える思想は共に偏った見方であることが解る。また、ドン・ファンのように意識する範囲を広げれば、脳自体の活動が活発になるのではないか。結局、いずれにしても、全ての神秘的な存在さえもが、人間に理解されるように構築されていると考えることは確実に、人間中心主義的な考え方に他ならない。

参考書

『精神としての身体』　勁草書房　市川浩
『意識への回帰』　二見書房　カルロス・カスタネダ　(真崎義博ー訳)
『日本人の身体観の歴史』　方藏館　養老孟司
『身体論』　講談社学術文庫　湯浅泰雄
『身体と間身体の社会学』　岩波講座現代社会学ー4　岩波書店